

論語を英語で読んでみようー3

大阪大学名誉教授 長谷川 晃

論語を英語で読むシリーズの3回目になる。英語で読むことで論語を和文で読むより意味がはっきりすることがお分かりになってきたことと思う。君子をそのまま和文で「君子」と読むより、英訳でgentlemanと読む方が親しみやすい気がする。

前回までで、1. 學而、2. 為政、3. 八佾（はちいつ）までの3章を紹介した。今回は第4章の里仁（りじん）からの抜粋から始めよう。この章には興味ある文章が多く出てくる。まず里仁の1から始めよう。

4. 里仁ー1

子曰、里仁為美。捉不処仁、焉得知。

この文は章のタイトルである里仁（りじん）の元になっている文章だ。孔子が最も重視する「仁」が出てくる節である。里はWaley氏の訳では文字通り neighborhood、つまり隣人と訳している。和文読みは里仁を仁におると読むようだが、これでは意味不明だ。里仁為美の英訳は The Master said, It is Goodness that gives to a neighborhood its beauty. つまり仁（Goodness）こそが隣人たちにその美をもたらすものだ、となる。

次の捉は「えらぶ」、と読み、捉不処仁は「えらびて仁の処（お）らずんば」と読む。つづく焉は「いづくんぞ」と読む、焉得知はいづくんぞ知を得ることができようか？となる。捉不処仁、焉得知の英訳は

One who is free to choose, yet does not prefer to dwell among the Good-how can he be accorded the name of wise?

つまり、選ぶのはその人の自由だが、仁を持つ人々の間に住むことをしなければ知者という名称にはそぐわない、と言っている。仁の意味は以前にも言ったが人偏に二と書くことから人が二人よればお互いのことを思いやるという意味からきている。新居を選ぶ時などに、近くの住人に仁、つまり他人をおもんばかり者がいるところを選ぶべきだと言っている。今なお心すべき金言だろう。

4. 里仁ー5

子曰、富與貴、是人之所欲也、不以其道得之、不處也、貧與賤、是人之所惡也、不以其道得之、不去也、君子去仁、

惡乎成名、君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是、

この文の後半の部分である、君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是、は私の恩師である大徳寺の小堀南嶺老師がよく引用された文章である、この箇所は「君子は食を終うるの間も仁に違（たが）うこと無し。造次にも必ず是（ここ）に於いてし、顛沛（てんぱい）にも必ず是においてす」と読む。この文は南嶺老師が禅の悟りについて筆者に解説してくれた時に紹介されたものだ。老師によれば、「悟り」というものは食事の間においても、造次（ぞうじ）つまり日常茶飯事の間においても、まして顛沛（てんぱい）すなわち、天地がひっくり返るような事件が起こった時にも、自分の中に持ち続けるものだというものだ。この文の「仁」を禅宗の「悟り」に置き換えて引用されていた。この文は我々科学者についても当てはまる。「仁」を科学的思考に置き換えるといい。いい仕事をしている科学者はまさに問題意識を同じ形で持ち続けることが必要だといえる。この部分の英訳は The gentleman who ever parts company with Goodness does not fulfill that name. Never for a moment does a gentleman quit the way of Goodness. He is never so harried but that he cleaves to this; never so tottering but that he cleaves to this. となっている。「君子は食を終うるの間も仁に違（たが）うこと無し」の部分 gentleman とは仁（Goodness）からひと時も離れた行いをするようであれば gentleman という名にふさわしくない、ひと時も仁の道から外れるべきではない。と訳している。続いて「造次にも必ず是（ここ）に於いてし、顛沛（てんぱい）にも必ず是においてす」の部分は He is never so harried but that he cleaves to this; never so tottering but that he cleaves to this. と訳していて、急いでいるためにこれ、すなわち、仁を尊重（cleave to）しないということがあってはならない、また同時に totter、つまり、けつまずくような時にも仁を尊重しなければならぬ、顛沛を totter と訳している。

それでは前半部分の解釈をしよう。前半は富貴と貧賤について道が意味することを説いている。孔子が言う道は仁を基本とする人の生き方を言う。富貴は人がこれを欲しがるものだが、道から外れた方法でこれを得るのでは

ダメだ。他方、貧賤は人々が嫌がるものだが、これらを避けるにあたっては道を守って行わねばならない。と言う。この部分の英訳は

The Master said, Wealth and rank are what every man desires; but if they can only be retained to the detriment of the Way he professes, he must relinquish them. Poverty and obscurity are what every man detests; but if they can only be avoided to the detriment of the Way he professes, he must accept them. となっている。富貴の英訳は wealth and rank, つまり、富と地位である。富と地位は誰もが欲するものだが、これを道に外れた (detriment) 方法で得たのであれば、それを捨てる (relinquish) べきだ、また一方、貧賤 (Poverty and obscurity) は誰もが detest つまり嫌悪するものだが、それを避けるために道から外れた行いをするのであれば、貧賤の状態に甘んじなければならぬと訳している。obscurity は曖昧ではっきりしないという意味を持つ obscure の名詞で、目立たない、つまり、rank、肩書き、を持たないという意味だ。以上の2節は仁、つまり、人を慈しみ、愛することが人間の基本であることを孔子が説いた文章である。

4. 里仁-8

子曰、朝聞道、夕死可矣、

これは論語の中でも有名な言葉がよく引用される。和文では、子の曰わく、朝 (あした) に道を聞いては、夕べに死すとも可なり。である。Waley氏の英訳は
The Master said, In the morning, hear the Way; in the evening, die in content. としていて「死すとも可なり」を満足して死ぬとうまく訳している。

4. 里仁-12

子曰、放於利而行、多怨、

この文の放於利は「利によりて行えば」と読む。「利」は利己主義として使われるように利益の意味に使われるが、Waley氏は expediency という文字を当てはめていて意味がより明確になる。expediency という言葉は、文字通り利己主義を意味するが、それ以外に方便とかご都合主義などの意味を持つ。多怨は恨み多し、で恨みを招くということだろう。全文の英訳は
The Master said, Those whose measures are dictated by mere expediency will arouse continuous discontent. となっていて、注釈として支配者の民衆に対する行いを意味していると述べている。ここの measure は自分が物事を判断する基準を意味する。

4. 里仁-14

子曰、不患無位、患所以立、不患莫己知、求為可知也。

この文も現在の我々に金言として心すべきことを表すものだ。患はうれうと読み、憂うの意味だ。無位は平安時代にも無位無冠としてよく使われた熟語で、位は政府の中での地位を表す言葉だが、現在では勤め先での役職を表すと思えばいい。不患無位、患所以立は、その役職につけないことを憂うのではなく、その理由を憂いなさい、という意味として捉える。憂うを英訳では mind という動詞を当てている。これは憂うというより、気にすると言う意味で、だいぶニュアンスが違う。患は病むという意味だから、憂うと読むと本来の漢字の意味ではないのかもしれない。やはり英訳の「気にする」と解釈の方が当たっているようだ。気にすると訳すと、文章のニュアンスは軽くなる。所以立の英訳は entitle him to office とうまく訳している。entitle one to ... という言い回しはよく使う述語で、...の資格があるという意味だ。

ここまで考えると、続く莫己知は己が知られないこと、英語で failing to get recognition, つまり認められていないことを気にするのではなく、となる。そして、求為可知也は知られるには何をすべきかを自問自答しなさいという意味になる。Waley氏の英訳は

The Master said, He does not mind not being in office; all he minds about is whether he has qualities that entitle him to office. He does not mind failing to get recognition; he is too busy doing the things that entitle him to recognition. としている。最後のセクションの訳は装飾のしすぎの感じがする。

4. 里仁-16

子曰、君子喻於義、小人喻於利。

これも短い文章がよく引用されるものだが、喻はさるとよみ、判断するという意味だ。君子は義に基づいて物事の成否を判断するという意味である。これに対して小人は利に基づいて物事を判断する、といている。Waley氏の訳は

The Master said, A gentleman takes as much trouble to discover what is right as lesser men take to discover what will pay.

となっていて喻るを take much trouble、つまり懸命に努力し、と訳していて、義には right を当て、君子は何が正義かを見つけることに懸命に努力するといっている。一方小人 (lesser man) は何が利益につながるかを見出すことに汲々すると訳している。what will pay はよく使われる口語だが、pay を it pays という言い方にも使われ、損をしないと言う意味を持つ。

4. 里仁-20

子曰、三年無改於父之道、可謂孝矣、

これも短くてわかりやすい文章だが、論語でしばしば出てくる親孝行の話だ。三年無改於父之道は文字通り、父の道を（死後）三年間は改めないことを親孝行というのだとしている。何度も言うが孔子は父性文化を代表する漢民族の賢者だが、この文ははっきりと、「親といえは父を指す」ことをものがたっている。英訳は

The Master said, If for the whole three years of mourning a son manages to carry on the household exactly as his father's day, then he is a good son indeed.

となっている。ちなみに、親孝行という言葉は英語にもあり、filial pietyという。filialとは子としての、という意味で、この言葉は親が父か母かを指すものではない。

4. 里仁-21

子曰、父母之年、不可不知也、一則以喜、一則以懼、

これも親孝行に関わる文章である。不可不知はしらすべからずと読む、つまり父母の年齢はこれを知らないでは済まされない、という意味だ、その理由は、一つは（長生きしたな）と喜ぶため、もう一つは懼（おそ）れるため、懼は気遣うという意味だ。英訳は salutary dread、つまり salutary、敬意を表するような恐れ、と訳している。両親の歳は知らざるべからずのものである。なぜなら、一つには長寿を喜ぶため、そしてもう一つは気遣うためだ。と、英訳は

The Master said, It is always better for a man to know the age of his parents. In the one case such knowledge will be a comfort to him; in the other, it will fill him with a salutary dread.

4. 里仁-24

子曰、君子欲訥於言、而敏於行。

この文も君子に関わる表現である。君子は言葉は訥（とつ）、つまり訥弁であっても、行いにおいては敏、すなわち素早いことを欲する。英語では

The Master said, a gentleman covets the reputation of being slow in word but prompt in deed.

として、あの人は訥弁だが、行動は早いと言われることを covet、つまり、望む、あるいは、欲しがるとしている。逆に雄弁だが行動が遅い人は君子ではない。

4. 里仁-25

子曰、徳不孤、必有鄰。

この文も短く孔子の言葉を表している。徳不孤は徳は孤ならず、必ず鄰（となり）あり、とよむ、英訳は

The Master said, Moral force never dwells in solitude, it will always bring neighbors.

として、徳の持つ価値をうまく表現している。dwells in solitude は孤独の中で住むという意味で、徳を持てば孤独の内に住むことはなく、必ず隣人たちがやってくると訳している。第4章に続く章は孔子の門人の一人、公治長の名をとって分類されている章だが、この章は孔子の弟子などの関する記述が多く、一般性がないのでこの章は採用しないことにして次の第6章、雍也、にうつることにする。

この章のタイトル、雍也、は孔子の門人の一人、冉雍（ぜんゆう）に対し孔子が雍也（ゆうや）と呼ぶ節から始まっている。

6. 雍也-18

子曰、質、勝文則野。文、勝質則史。文質彬彬、然後君子。

この文章は君子とはこうあるべきだと孔子がうまく表現している節だ。文字通りに読めば「質」が「文」に勝れば野となり、逆に文が質に勝ると史となる。文と質が彬彬としておれば、然るのちに君子となる。とよめる。さて質の英訳は natural substance つまり生まれながらの資質を言う。一方文の英訳には ornamentation つまり、飾り付け、を使っている、結果、この文は「資質が飾り付けを上回ると野となる」となる。しかし、注釈として勝文則野を分かりやすく when nature prevails over culture、つまり自然が文化に打ち勝てばとしている。野には、boorishness of the rustic、つまり、粗野な田舎者という訳を当てている。

続く節では、逆に文が質に勝れば史となる。史の意味は文書係、英訳で pedantry of the scribe、つまり scribe、文書係の学者ぶり、としている。日本語では頭でっかちということだろうが。そして、結論としては、人間生まれながらの素質と後に身につけた学問がうまく溶け合って調和していて初めて君子と呼ばれる存在になる。と言っている。彬彬はひんぴんと読み、外形と内容がうまく調和している様を言う。全文の英訳は

The Master said, When natural substance prevails over ornamentation, (when nature prevails over culture), you get the boorishness of the rustic. When ornamentation prevails over natural substance, you get the pedantry of the scribe. Only when ornament and substance are duly blended do you get the true gentleman.

6. 雍也—20

子曰、知之者、不如好之者。好之者、不如樂之者。

この文は、知るものは好むものに如（し）かず、好むものは楽しむものに如かず。と読めて、学問でも芸術作品でも、単にそれを知っているよりは好むまで行ったほうがよく、さらに好むを通り越してそれを楽しむまで行かないとだめだ、本物にはならない、と言う意味だ。含蓄がある例えである。英訳も分かりやすく、

The Master said, To prefer it is better than only to know it. To delight in it is better than merely to prefer it. としている。仕事をする上に参考になる表現と言えよう。

6. 雍也—23

子曰、知者樂水、仁者樂山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽。

この文はよく禅宗の和尚が書にして飾ったりする句である。孔子は仁者と知者を対比してこのように記述することがよくある、どちらが上とか下とか言う意味ではないと思われるが、それぞれの人間性を対比して表現するようだ。この文は文字通り、知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。知者は動き、仁者は静かなり。知者は楽しみ、仁者は寿（いのちなが）し。と読む。英訳は

The Master said, The wise man delights in water, the Good man delights in mountains. For the wise move; but the Good stay still. The wise are happy; but the Good secure. となっている。寿に secure を当てているのは和文のいのちながとは少し意味が違って、安全だと言う意味だ。水を楽しみ、の時の楽しみには delight in と目的語がついているときには他動詞の楽しむを使い、後の目的語のない時の楽しみには happy という自動詞を当てているのは良い英語の勉強になる。

7. 述而—6

子曰、志於道、據於德、依於仁、游於藝、

この文は、子の曰わく、道に志し、徳に拠（よ）り、仁に依り、芸に游（あそ）ぶ、と読む。この文も人の生き方に対するアドバイスだ。道に志しは、Set your heart upon the way と訳されていて、道に基づいて心をセットすることから始める。そして、徳に拠り、は support yourself by its power と訳している。ここの its は道、way、を表す。道力で自身を支えなさい、と訳している。つづく、仁に依りは lean upon goodness, と訳し、仁、は goodness, 依りは lean upon つまり寄りかかる、を当てている。そして、芸に遊ぶは seek distraction in the arts とうまく訳している。seek distraction とするのは気晴らしを求めると言う意味だが、arts つまりいろんな芸術、音

楽や美術など、で気晴らしをしなさいという。この堅苦しく聞こえる漢文をうまく気さくな文章で表現している。全体の英訳は

The Master said, Set your heart upon the way, support yourself by its power, lean upon goodness, seek distraction in the arts.

徳の英訳は virtue だが、ここでは power を使って意味を強調している。

7. 述而—8

子曰、不憤不啓、不悱不發、舉一隅而示之、不以三隅反、則吾不復也、

この文は孔子が弟子たちに教訓を垂れているものだが、今なお教師として生徒たちを導く場合の参考になる言葉である。不憤不啓は Only one who bursts with eagerness do I instruct と訳し、憤（ふん）を burst with eagerness と訳している。つまり生徒が情熱を爆発させなければ私は教えない、と訳している。和訳では憤（ふん）せずんば啓せずと読む。続く不悱不發はひせずんば発せずと読む。悱は口をもぐもぐさせるという意味だが、興奮して何か言いたくなることを意味する。それでなければ私は発しない、これは、強く指導しないという意味だろう。英訳は only one who bubbles with excitement, do I enlighten. としている。そして、舉一隅而示之、不以三隅反、つまり、一隅を挙げて示したら、三隅を以って返答してこなければ、私は則吾不復也、つまり、即座に反復しない。英訳では If I hold up one corner and a man cannot comeback to me with the other three, I do not continue the lesson としている。学生を教育するためには、学生自身をその気にさせなければうまくゆかない、ということだ。嫌なものを無理やり指導してうまくゆくはずがない。教えるためにはまず学生をその気にさせることから始めないといけないと言っている。今なお通用する言葉だ。

今回はこれくらいにしておこう。

(通信 昭和32年卒 34年修士)